

## プロフェッショナリズムの涵養を主題とした 初年次教育科目「臨床医学入門」の試み

### Education of Professionalism by “Introduction to Clinical Medicine” for 1st Grade Medical Students.

加藤 博之\*、松谷 秀哉\*、  
小林 只\*\*、大沢 弘\*\*

Hiroyuki KATO, Hideya MATSUTANI, Tadashi KOBAYASHI, Hiroshi OSAWA

#### 要 旨

【背景と目的】医学部1年生に対し、入学後のモチベーションの低下を防ぎ、能動的な学習姿勢を修得させ、さらに医師のプロフェッショナリズムを涵養する教育方法は、未だ確立されたものがあるとは言いがたい。本学では1年次に「臨床医学入門」の授業を通年で行なって、この問題への対応に努めており、本稿では本科目の全体像について報告する。【対象と方法】1年次学生を対象とし、平成21年度より開講している科目「臨床医学入門」は毎週水曜の午後行われる。教育方法は講義、実習、演習（ワークショップ）など多岐にわたる。授業内容としては、(1)「こんな医師になりたい」をテーマに作文を書き、同級生全員の前で自己紹介を兼ねて発表、(2)「患者さんの願いと医師が果たすべき役割」をテーマとしたワークショップ、(3)「弘前大学医学部の歩みとこれから」の講義、(4)アーリーエクスポージャー、(5)地域医療の最前線の医師による講義「現場の医療を知ろう」、(6)コミュニケーション実習「模擬患者さんと話してみよう」、(7)地元について知る講義「津軽学」、(8)まとめのワークショップ、などから成っている。これらの教育内容はいずれも、Intrapersonal professionalism、Interpersonal professionalism、Public professionalismの涵養に通じるものである。これらは医師になる者の基本であり、特に本学学生の約半数を占める地域枠入学者のPublic professionalismの修得は重視されている。【結論】プロフェッショナリズムの涵養に焦点を当てた初年次教育は、長期的な効果が期待できる。

キーワード：医学生、初年次教育、プロフェッショナリズム、地域枠入学

---

\* 弘前大学大学院医学研究科総合診療医学  
General Medicine, Hirosaki University Graduate School of Medicine  
\*\* 弘前大学医学部附属病院総合診療部  
Department of General Medicine, Hirosaki University Hospital

## 〈はじめに〉

医学部6年間の教育の中で初年次の教育は、高学年の教育に比べて難しいと言える。高学年の教育では、学生は医師になることの自覚がある程度できており、教えることもほぼ決まっているのに対し、初年次学生は医学生としての自覚も未熟な上に、“何を教えるべきか”が高学年ほど定まっていない。また受験勉強に明け暮れたそれまでの生活と医学部入学後では、生活そのものも激変する。これらのことが医学部初年次教育特有の難しさを生み出している原因と言えるだろう。そもそも教育する立場から見れば、初年次学生への教育目標は、①入学後のモチベーションの低下を防ぐこと、②受動的な学習態度から能動的な学習態度へ転換させること、③挨拶、言葉遣い、マナーなど社会人として、また人間としての基本的態度の確認や再教育（授業中の態度を含む）、④他人に対する思いやりや共感力の醸成（＝患者に対する姿勢の初歩的手ほどき）、⑤本学医学部に対する帰属意識を高め、誇りを持たせること、⑥地元や地域に対する理解を深め「地元志向」、「地域志向」の芽を育てること、⑦「医師不足問題」に関する当事者意識の涵養、⑧2年次科目「地域医療入門」への連続性を図ること（＝2年次への準備教育）、など多岐に渡る。これらはひと言で言えば、「医師のプロフェッショナルリズムの涵養」ということになるが、それを確実に達成するための具体的な教育方法には、未だ確立されたものがあるとは言い難い。本学では1年次に「臨床医学入門」という科目を開講し、通年の授業を行なって、この問題への対応に努めているが、本稿では本科目の全体像について報告する。

## 〈「臨床医学入門」の概要〉

本科目は医学科1年次学生を対象として、平成21年度より開講された。授業は毎週1回、水曜日の午後行なわれ、通年で開講されている。その教育方法は、講義、実習、演習（ワークショップ）、アーリーエクスポージャーなど多岐にわたる。平成26年度の授業内容を表1、表2に示す。

表1 平成26年度「臨床医学入門」前期日程

回数	開講日	講義内容
1	4月9日（水）	「臨床医学入門」オリエンテーション
2	4月16日（水）	自己紹介と抱負発表会「こんな医師になりたい」(1)
3	4月23日（水）	自己紹介と抱負発表会「こんな医師になりたい」(2)
4	4月30日（水）	自己紹介と抱負発表会「こんな医師になりたい」(3)
5	5月14日（水）	自己紹介と抱負発表会「こんな医師になりたい」(4)
6	5月21日（水）	講義「弘前大学医学部の歩みとこれから－教育編」(1)
7	5月28日（水）	講義「弘前大学医学部の歩みとこれから－診療編」(2)
8	6月4日（水）	講義「弘前大学医学部の歩みとこれから－研究編」(3)
9	6月11日（水）	ワークショップ授業「患者さんが医師に求めるもの」(1) 学籍番号 前半の者
10	6月18日（水）	ワークショップ授業「患者さんが医師に求めるもの」(2) 学籍番号 後半の者
11	6月25日（水）	講義「現場の医療を知ろう」(1)
12	7月2日（水）	講義「現場の医療を知ろう」(2)
13	7月9日（水）	講義「津軽学」(1)「白神の魅力」
14	7月16日（水）	講義「津軽学」(2)「医学津軽弁」
15	7月23日（水）	総合演習
16	7月30日（水）	期末試験

表2 平成26年度「臨床医学入門」後期日程

回数	開講日	講義内容
1	10月1日(水)	ワークショップ授業「アーリーエクスポージャーから学んだこと」(1)
2	10月8日(水)	ワークショップ授業「アーリーエクスポージャーから学んだこと」(2)
3	10月22日(水)	講義「津軽学」(3)「世界からこころのふるさと津軽を考える」
4	10月29日(水)	講義「津軽学」(4)「ねふた絵の歴史」
5	11月5日(水)	講義「模擬患者さんと話してみよう」
6	11月12日(水)	講義「現場の医療を知ろう」(3)
7	11月19日(水)	実習「模擬患者さんと話してみよう」(1)
8	11月26日(水)	実習「模擬患者さんと話してみよう」(2)
9	12月3日(水)	実習「模擬患者さんと話してみよう」(3)
10	12月10日(水)	実習「模擬患者さんと話してみよう」(4)
11	12月17日(水)	講義「現場の医療を知ろう」(4)
12	12月24日(水)	講義「津軽学」(5)「津軽の歴史」
13	1月7日(水)	まとめのワークショップ「医師になるために大事なもの」(1) 学籍番号 前半の者
14	1月21日(水)	まとめのワークショップ「医師になるために大事なもの」(2) 学籍番号 後半の者
15	1月28日(水)	総合演習
16	2月4日(水)	期末試験

### 具体的な授業内容は

- (1) 自己紹介と抱負発表会「こんな医師になりたい」
- (2) 「患者さんの願いと医師が果たすべき役割」をテーマとしたワークショップ
- (3) 「弘前大学医学部の歩みとこれから」の講義
- (4) アーリーエクスポージャー
- (5) 地域医療の最前線の医師による講義「現場の医療を知ろう」
- (6) コミュニケーション実習「模擬患者さんと話してみよう」
- (7) 地元について知る講義「津軽学」
- (8) まとめワークショップ

以下に、これらについて概説する

#### (1) 自己紹介と抱負発表会「こんな医師になりたい」

入学して第1回目の授業では早速、「将来の夢－こんな医師になりたい」をテーマとして、自分の目指す医師像を2000字程度にまとめて、1週間以内に提出するよう宿題が出される。2回目の授業から4週連続で、1回に25名程度、同級生全員の前で、同テーマについて、一人2分以内でスピーチを行なう。これは同級生に対する自己紹介の意味も兼ねている。「何のために弘前大学医学部に入ったのか」を自ら再確認し、モチベーションの原点を認識するための授業である。実際に学生たちが行なうスピーチの内容や深さは様々である。入学試験用の“面接対策”の域を出ない表面的なスピーチがある一方で、深い思索に基づき、強固な動機付けを感じさせる、聞く者に感銘を与えるスピーチも少なくない。同級生のスピーチを聞いた学生たちの感想は、

- ・「自分より、ずっとしっかりした考え方をしている人が多いのに驚いた。自分の考えは、あいまいで、甘いと思った」
- ・「同級生たちが、それぞれに真剣に医師への夢を考えていることがわかり、嬉しかった」
- ・「『入試の面接用の建て前』でない本音が聞けて良かった」
- ・「こんな同級生たちと6年間一緒に学ぶことを誇りに感じた。自分も頑張ろうという気になった」などがあり、同級生同士かなり刺激となっていることが伺える。

## (2) ワークショップ授業「患者さんが医師に求めるもの」<sup>1)</sup>

これは学生を半数ずつに分けて、同内容の授業を2回行なうワークショップ形式の授業である。時期は入学して2～3ヶ月たった6月～7月頃に行なっている。内容としては、まず附属病院玄関に毎年飾られる七夕飾りの短冊に書かれた患者さんやその家族の願い事を学生たちに見せ（図1）、その後KJ法を使って「患者さんや家族が医師に求めるものとは何か」について考えさせ、討論してまとめる形式を取っている。患者さんとそのご家族が抱く、医療・医学・医師に対する期待を認識するための授業であり、また小グループによる作業を通じ、対人コミュニケーション能力やチームに溶け込む能力を養うことも目的としている。

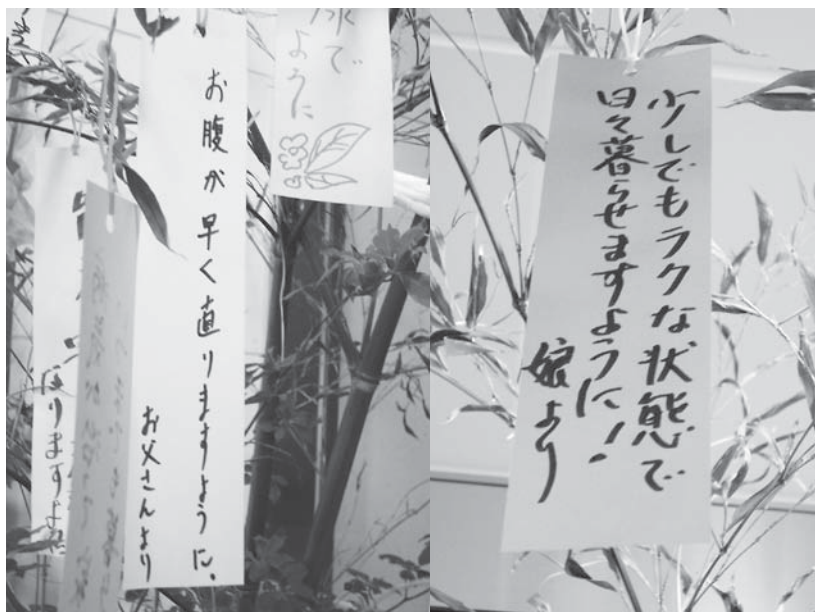


図1 ワークショップ授業「患者さんが医師に求めるもの」で、学生たちに見せている七夕飾りの短冊の例

## (3) 講義「医療の現場を知ろう」

前期2回と後期2回、青森県内の地域医療の最前線で、いわゆる“医師不足科”（小児科、産婦人科、麻酔科など）の診療に従事している医師が講義を行う。現場のリアルな話が聞ける。

## (4) 講義「弘前大学医学部の歩みとこれから」

弘前大学医学部の歴史と今後の方向性について、教育、診療、研究の3つの観点から、学務委員長（教育について）、附属病院長（診療について）、医学部長（研究について）が講義を行なう。70年を越える本学医学部の長い歴史の中で、本学が生み出した多彩な人材や先輩諸氏の輝かしい業績を紹介し、さらに本学卒業生が持つ強固なネットワークの存在も1年生に意識させる。さらに自分たちが、これから受ける教育について紹介し、期待感を醸成することによりモチベーションの低下を防ぐ。端的に言え



ば、母校に対する誇りを持ってもらうことが大きな目的である。

#### (5) アーリーエクスポージャー

全国の医学部で主に1年次に行なわれている教育である。本学の場合は、夏休み明けの9月上旬に、医学部附属病院で2日間、地域の老健施設などで2日間の計4日間の実習を行なっている。附属病院の実習では、原則として準夜帯に看護師さんに付いて、また老健施設では介護職員に付いて実習を行なう。実習後には「アーリーエクスポージャーを通じて感じた“医療で大切なもの”」というテーマで感想文を書いて提出する。この中では「実習中、どのようなことを見聞してそう思ったのか」、「なぜ大切なものだと感じたのか」を必ず記載するよう指導している。さらに、10月からの後期授業の開始にあたっては、2週連続でアーリーエクスポージャーについてまとめの発表会を行なっている。

#### (6) コミュニケーション実習「模擬患者さんと話してみよう」<sup>2)</sup>

これは模擬患者さん（SPさん）を相手に行なうコミュニケーションを体験してもらう実習である。具体的には、学生5～6名で小グループを作り、学生1名がSPさんに「自分はこんな医師になりたい」について5分間で話す（図2）。この間、他の学生は評価者として評価シートをつける。話し終わったのち、8分間で学生同士フィードバックを行い、さらにSPさんからもフィードバックを頂く。学生全員が体験するよう、これを繰り返す。学生に、「きちんと伝えることは意外に難しい」、「『なりたい医師』になるために、自分はどのような努力や心がけをすべきなのか」などを自覚してもらうとともに、“模擬患者さんに受け止めてもらった”感覚を持ってもらうことを目的としている（これは将来「自分が患者さんを受け止めよう」という感覚につながるため）。また、言葉づかい、服装、髪型を含めた態度についても、SPさんからフィードバックが行なわれる。



図2 コミュニケーション実習「模擬患者さんと話してみよう」で  
模擬患者さんに話す学生

#### (7) 講義「津軽学」

1年次学生が6年間を過ごすことになるこの地について知ってもらうことを目的とし、「白神の魅力」（自然）、「医学津軽弁」（方言）、「ねぶた絵の歴史」（祭り）など、当地の自然や文化をテーマとした講義を行なう。受講した学生の反応は、「この地に素晴らしい文化や自然があることがわかり、嬉しかった」

というものが多かったが、青森県出身の学生であっても「地元出身なのに、知らないことばかりで恥ずかしかった」という意外なものもあり、地元出身者だからといって必ずしも地元のことに精通しているとは限らず、改めて地元を見直すきっかけになっていた。

#### (8) まとめのワークショップ

1年間の本科目の学習を総括するものとして、学年を半数ずつに分け、2回にわたって、小グループにより、KJ法を使用して、まとめのワークショップを行なう。テーマは「医師になるために大切なものはこれだ!」である。ワークショップに取り組むにあたり、本科目で1年間勉強した内容を特別に意識させることはあえてしないが、前期で行なったワークショップに比べ、議論の白熱度は明らかに高い。授業で様々な知識を得たことに加え、アーリーエクスポージャーや模擬患者さんとのコミュニケーション実習など、多少なりとも実践を積んだことが反映していると思われる。

#### 〈本科目の組み立てと期待される教育効果〉

医師のプロフェッショナリズムは厳密に考えれば多岐に渡るが、本学では、1年生にわかりやすく伝えるために表3のように3つのプロフェッショナリズムに分類して教えている。

表3 医師のプロフェッショナリズム

<p>A. <u>Public professionalism</u> (社会に対するプロフェッショナリズム) 社会から期待されている役割を果たすこと。医師としての社会的責任を果たすこと。</p>
<p>B. <u>Intrapersonal professionalism</u> (自分に対するプロフェッショナリズム) 職業人として、自らに厳しく、たゆまず精進を続ける姿勢。己の限界をわきまえ、恣意的な診療をしないこと。</p>
<p>C. <u>Interpersonal professionalism</u> (他人に対するプロフェッショナリズム) 患者・家族、同僚など、他者に対し、常に誠意や思いやりをもって配慮ができること。相手を尊重し、十分なコミュニケーションを取ることができること。</p>

「臨床医学入門」は、将来医師として働く1年生がプロフェッショナリズムを身につけるための第一歩として位置づけられる。〈はじめに〉でも述べた本学1年生への教育目標を、A、B、Cの3つのプロフェッショナリズムと関連付けて改めて考えると、以下のようにまとめられる。

- 1) 入学後のモチベーションの低下を防ぐ (B)
- 2) 積極的に自ら学ぶ能動的な姿勢の涵養 (高校までの受動的な学習とは異なることを自覚させる) (B)
- 3) 挨拶、言葉遣い、マナーなど、社会人として、また人間としての基本的態度の確認、しつけ、再教育 (授業中の態度を含む) (C)
- 4) 他人に対する思いやりや共感力の醸成→患者に対する姿勢の初歩的手ほどき (C)
- 5) 弘前大学医学部に対する帰属意識を高め、誇りを持つ (A)
- 6) 地元や地域に対する理解を深め「地元志向」、「地域志向」の芽を育てる (A)
- 7) 「医師不足問題」に関する当事者意識の涵養 (A)
- 8) 2年次科目「地域医療入門」3)への連続性を図る (2年次への準備教育) (A)

即ち、目標を達成するための具体的方策として、前述のごとく講義、実習、発表会、ワークショップ、レポート作成などを行っているが、本科目の教育内容はいずれも3つのプロフェッショナリズムの涵養に通じるように組み立てられている。この3つは、どれも医師となる者の基本的行動規範であり、将来これらをしっかりと身につけた医師となることが期待されているが、とりわけ本学学生の約半数を占める地域枠入学者のPublic professionalism（社会に対するプロフェッショナリズム）の修得は重視されている。いわゆる医師不足地域で長年に渡って医療を続けてゆくことは、単に「義務だから」では到底持続困難であり、Public professionalismに裏打ちされた医師としての使命感、責任感抜きには考えられないからである。

教育を行った際に、その効果を評価することは重要であるが、プロフェッショナリズムの修得のように学生の内面で徐々に醸成されるものを、短期的に、目に見える形で測定することは難しい。本科目を初年次教育として行なうことによって、直ちに適切なプロフェッショナリズムの涵養がなされたかを正確に評価することは困難であると言えよう。しかし、だからと言って初年次にこのような趣旨の教育を何も行わないことも到底肯定できない。長期的な教育効果を期待し、プロフェッショナリズムの涵養に焦点を当てた教育を初年次から行うことは不可欠であると思われる。

## 文 献

- 1) 加藤博之, 松谷秀哉, 大沢 弘, 中根明夫: 医学科1年次教育科目「臨床医学入門」におけるワークショップ授業の教育効果. 21世紀教育フォーラム 9: 27-33, 2014
- 2) 加藤博之, 松谷秀哉, 大沢 弘: 医学科1年次学生に対する, 模擬患者によるコミュニケーション実習の試み. 21世紀教育フォーラム 6: 31-40, 2011
- 3) 加藤博之, 廣田和美, 松谷秀哉, 大沢 弘: 医学科2年次教育科目「地域医療入門」におけるワークショップ授業の教育効果. 21世紀教育フォーラム 7: 37-44, 2012